

母娘菊花奴隸

鮎川かほる

体験版

雪乃は使用人の高倉力也に熟れた体をいいように弄ばれていた。力也の性欲は異常なほどに強く、雪乃は毎晩抱かれた。それは大げさではなく本当に毎晩なのだ。雪乃は疲労の蓄積を感じないではおれない。

今夜も煌々とつけられた照明の下、ベッドで足を開いて仰向けに寝る雪乃はすでに全裸で、花芯に太い肉色の張り型を入れられていた。力也はそれを抽送し雪乃の口から喘ぎ声を漏れさせ、ときおり手を

休めては寝室に備えられている高級ウイスキーを飲む。雪乃の亡くなった夫がコレクションしていたウイスキーでそれをストレートで飲みながら、太い張り型を呑み込んでいる雪乃の花芯を眺めるのだ。

「うまそうにくわえ込みやがって」

力也は目を細め、ウイスキーをまた飲んだ。雪乃は恥ずかしがって足を閉じようとするが、

「隠すんじゃないぜ。奥様のおまんこの鑑賞会だぜ」

と内股をぴしゃりと叩かれ、また足を開いて破廉恥な格好に戻る。雪乃の花芯は張り型で長時間嬲られ、濡れそぼっているが充血も見られる。

「わたしの体を使ってもうすませてよ…ずっと入れられて…痛い…腫れているわ」

雪乃は性交を懇願した。

「おまんこに啜えたいんだな？」

力也は張り型を揺すった。

「そうよ。啜えたいわ」

雪乃はそう言うと美しい顔を横に向けた。さらりとした艶やかな髪が波うつ。

ようやく張り型が抜かれた。雪乃の分泌させた粘液で照り光っている。太く長い張り型で、これで責められていた雪乃はすでに気をやっており、疲労感に襲われていた。

力也の大柄な体が覆いかぶさってくる。口を吸われた。雪乃は力也の舌を受け入れた。固い男根が雪乃の股間に当たっている。雪乃は男根で貫かれた。異物を入れられ長時間騎られた膣に痛みが走った。力也のものは、先ほどまで使用されていた張り型同

様に長大だ。亀頭の張りが大きく、えぐるように動くのだ。獣のような荒々しい性交だった。夫との性交では決してなかった女体をいたぶるような動きなのだ。力也は雪乃を四つん這いにさせ後ろから貫く体位を好んだ。しかも行為の最中に尻を叩くのだ。雪乃は深い恥辱感に苛まれた。使用人の男に征服された感覚なのだ。

力也が欲望を放った。ピルの服用を義務づけられている雪乃は妊娠する心配はないが、力也が放つ精液は大量で、毎晩浴びているのだ。